

子ども達をめぐる日本社会の問題点と、その改善に向けての一提案

— 教育現場の視点から —

執筆者 齋藤 健二

研究の目的と方法

筆者は 22 年間、日本の公立小学校及び中学校教諭として勤務してきた。その実感として、現代の子ども達の生活面や学習面の状況に大いに憂慮している。現在の日本の子ども達はそのどちらの面においても非常に脆弱な面をもっている。それは、特にこの 12, 3 年で感じられるものであり、筆者が 2 年間滞在していたパプア・ニューギニアの子ども達との比較においてさらに強く感じられることである。

しかしながらその責任を子ども達に求めることはできない。その責任は、子ども達をめぐる社会にあると言えるからである。その社会とは家庭であり、地域社会、日本社会全体であり、あるいは学校である。その中で、子ども達にとって社会の最小単位である家庭における保護者の影響、そして子ども達はその生活の中で多くの時間を費やす学校の影響は、とりわけ大きいと考えられる。

そこで本論文では、子ども達をめぐる日本社会の問題点を明らかにするとともに、保護者の置かれている状況に焦点を当てながら、問題点の改善を図るための提案を行うことを目的とした。

研究における対象は、子ども達をめぐる社会(家庭、地域社会、日本社会、学校)の問題点である。とりわけ保護者の状況に重きを置いた。

研究は (1) 子ども達をめぐる日本社会の問題点を、教師としての経験をもとに整理していくとともに、各種文献・資料に当たりながら明らかにする。(2) 茨城県 C 市 N 中学校における学校評価を資料とし、保護者の意識やその置かれている状況を探る。(3) 近年行われている、地域と学校の連携・融合を目指す教育実践から、これからの可能性を探る。という 3 つの方法によって進めた。

論文の構成

はじめに

第1章 子ども達の姿

第1節 生活面での変化

第2節 学習面での変化

第3節 パプア・ニューギニアとの比較において明らかになる子ども達の姿

第2章 子ども達をめぐる社会の問題点

第1節 保護者

第2節 地域社会

第3節 一般社会

第4節 学校

第5節 教育行政

第3章 保護者をめぐる状況と問題点

第1節 学校評価について

第2節 学校評価の結果と分析

第3節 学校評価の結果および意見要望から読み取れる保護者の状況と問題点

第4章 解決に向けて

第1節 社会に必要な改善

第2節 学校に必要な改善

第3節 保護者に必要な改善

第4節 地域・学校・保護者をつなぐ試み

第5節 まとめに代えて

おわりに

参考文献

論文の概要

筆者は 1985 年度から小学校に 10 年間勤務したあと 1995 年度に N 中学校に異動し 10 年間教師として勤務した。N 中学校に 6 年間勤めた時点で、2001 年度に青年海外協力隊員としてパプア・ニューギニアに赴任した。帰国後 2 年 4 ヶ月ぶりに N 中学校に戻ったのが 2003 年 8 月であり、そこで筆者は大きく変化した生徒の姿を目にすることになった。

生活面においては集団生活を送る上でのコミュニケーション能力の不足、対人関係で抱える不安、問題解決能力の不足、自己に対する評価基準の変化などが見られ、教師側もこれまで通用していた指導方法がなかなか成果を挙げない状況になっていた。学習面でも、家庭学習時間の減少、学習意欲の低下、集中の持続時間の減少などが見られた。これらの姿は全国的な調査結果とも一致している。

日本の子ども達の姿と対照的なのはパプア・ニューギニアの子ども達のそれである。彼らは、外遊び、身体遊び、異年齢集団、ガキ大将、年少者への配慮、子ども達同士の解決、我慢、炊事、洗濯、掃除、子守り、家族の団欒、と、およそ日本の子ども達が失ってしまったものをたくさんもっている。このような生活をしている子どもたちは、ある意味日本の子どもたちの対極にいるということがいえるであろう。日本の子どもたちに比べて体力、創造力、人間関係能力、耐性、すなわち「生きる力」がずっと高くたくましい子どもたちが育っていると言える。

こういった子ども達の変化に影響を及ぼしていると考えられる社会について考えるときにまず述べなければならぬのは保護者の現状や問題点である。近年、保護者自身が変わってきている。子ども同士のトラブルを捌けない、自分の子どもへの接し方がわからない、自分の子どもの立場しか考えられない、子どもの苦労をかわいそうだと考える、わが子が悪いときにかばってしまうような姿を見せる。学校へのクレームも明らかに増えており、中には保護者が開き直ったり、威圧的・暴力的だったりすることもあり、教師いじめと見られる事例もある。学校へのクレームが急増するにしたがって、学校に過剰反応・過剰防衛がおこり、必要以上に保護者に気を遣ったり生徒への指導が中途半端になったりする傾向も出てきている。

保護者の世代間格差の影響もある。47、48 歳より上の世代は「忍耐」「協調」「連携」といった精神を身に付けており比較的教師に協力的であるのに対して、30 歳代半ばから 40 代半ばは保護者自身が個人主義で自己中心的な人が多く、人間関係が苦手な耐性が弱いとされる。30 歳代半ば以下になると保護者自身、基本的に我慢することを学んでいない人が非常に多い。今の中学生の保護者のほとんどは 30 歳代半ばから 40 代半ばである。

しかし一方で、保護者自身もその力不足のために家庭教育力が低下していると感じ危機感をもっている。子育てに関しての悩みを抱えている保護者が多い。保護者は保護者なりに危機感をもちながらきちんと教育するべく取り組もうとしているものの、出生率 1.32 の今、子育て初体験というのがほとんどであり、核家族化、地域の弱体化、労働時間の拡大などの中で「孤立」ともいえる状況に陥っていると考えられることができる。

地域社会の問題も見逃すことができない。仕返しや不審者と間違えられることが懸念され、地域の大人がなかなか子どもに声をかけられない現状がある。子ども達と地域との距離は離れるばかりである。

一般社会に関しては、教育現場で問題となるのが「非行の入り口」となる可能性が指摘されながらも野放しである携帯電話や、一向に改善されない露骨過ぎる少女マンガの性表現、子ども達が大事にさ

れすぎる風潮、あまりに強い「ほめて伸ばす」傾向、テレビの悪影響、言った者やった者勝ちの自分の損得だけで片付けてしまう風潮などである。子ども達の成長には社会の影響があるにもかかわらず、それを無視して「教育」だけが語られていることが非常に多い。

学校に関しての問題点も非常に多い。まずは教師があまりにも多忙なことである。月の残業・持ち帰り勤務時間は平均で90時間を越えるほどであり、教科指導のほかに警察的、カウンセラー的、民生委員的、スポーツ・音楽トレーナー的に仕事をし、集金業務や苦情処理の仕事に当たる。以前よりきめ細やかさが要求されそれにつれて忙しさはどんどん増している。

そのため生徒の相談に乗る時間が取りにくくなったり、時間をかけた教材研究ができにくくなったりしている。精神的にゆとりがなくなることで生徒へ影響が出、身心をすり減らす教師も増加している。教師の仕事は、教育改革が行われ新たな方策が講じられるたびに増えている。「こんなふうに、できたらいいな」というポジティブリストが増える一方ですでにあるリストは減らないからである。

教師がルールやマナーの指導に意識を向けすぎたり、生徒の心の動きに鈍感であったり、生徒の力を過小評価したりして効果的な指導のタイミングを逸すことも多い。「いい授業」に対する教師の幻想が学力の伸びを阻害している場合さえある。

ゆとり教育が結局は見直されているように、教育行政が無理な改革を続けてきたことでそのしわ寄せが子ども達に行っていることも事実である。

実際の保護者の意識について、N 中学校で行われた学校評価から明らかにしようと試みた。

数値による分析によると、教師側としては過大評価と感ぜられるほどわが子に対してたいへん前向きな見方をする保護者が多い。そこに保護者の根源的な問題、即ち保護者が生徒の姿を正しく見ていない、子ども達に対する要求水準が低下している、などが隠れていると考えられる。一方、わが子に否定的な見方をする保護者もあり、子どもの姿に不満足で思うように育っていないことで不安な状態におかれている。

自由記述からは、子育てに関して保護者の責任を自覚している意見も見られた反面、生徒をかばってしまう保護者、なるべく学校に依存してしまおうと考えている保護者、正しい情報を必要とする保護者、自分の持論を展開する保護者、物事を批判的に捉える保護者などが見られた。生徒の学年が進むにつれて保護者自身が成長していく様子を示す結果も見られた。

子ども達をめぐる社会に必要な改善点の第一は前述のような要因の排除である。また「早寝早起き朝ごはん」運動のように地域社会、学校、家庭が一体となって心身ともに健康な子ども達の育成を目指すような活動も必要である。

学校に関しては教師が保護者とともに子どもの成長を見守っていくという取り組みを残しつつ、ポジティブリストを整理することが不可欠である。苦情や無理難題要求を受け止めて調整する機関も必要とされる。

保護者については、保護者自身が責任を果たすとともに、保護者が「孤立化」しないようなサポートの仕組みが望まれる。

学校が飽和状態にある中で地域の力で打開していく実践例がある。中でも、地域住民が教職員とは違った立場で、自主的・自律的に学校づくりに参加し、それを通じて自分たちの地域や自分自身をも豊かにしていくことを狙っている習志野市「秋津コミュニティ」の実践はよいモデルである。学校と地域

の乖離が起こっている現在、再び地域と学校が結びつくことで保護者も子ども達の成長に積極的に関わり、子ども達が健全な成長をとげていくことが期待できる。

本論文では教育現場からの視点をもとに、子ども達をめぐる社会の問題点を、保護者、地域社会、一般社会、学校といった部分で個々に探り当ててきた。しかし大切なことはそれらをばらばらに考えるのではなく、トータルにとらえて解決を図る視点をもつことである。大人も子どもも地域を知り、お互いを知り、自分自身をよく知っていくことで、地域が豊かになり、そこで育まれる子ども達は、今と違った姿を見せるに違いない。